

# 講評文

12月25日 6番目

聖霊高校

## 「BONE to be loved」

この作品は、若くして突然亡くなった義幸さんという男性の火葬のあと、妻と娘、そして義幸さんの母親と遺族が、その遺骨をめぐる様子を描く物語です。

幕が上がると、一目で収骨室であることがわかるリアルな舞台美術に、聞こえてきたのは賑やかな「手のひらを太陽に」の曲。冒頭から視覚と聴覚のイメージのギャップに戸惑いましたが、火葬場のスタッフの会話や間違っって収骨室に入ってくる人たちなど、思わず笑ってしまう場面が次々に出てきて、観る側の緊張もやわらいでいきました。

演技面では、高校生・母親・祖母の三世代の登場人物をその年齢に合わせた喪服や声色で演じ分けておられたのですばらしいと思いました。技術面では、回想シーンやバトルシーンで照明が切り替わったり、音響が笑いを引き立たせるために効果的に使われていたりしましたが、物語の後半にかけて妻と母親が義幸さんとの思い出を共有しお互いのことを理解しあうようになると、音響と照明が切なさを繊細に表現するように自然に変化していったので、感動しました。

終盤、娘の美咲が亡くなった父親の骨に向かって話すシーンが強く印象に残りました。これから訪れるはずだった当たり前の日常が突然消えてしまった悲しみと、父にしたこれまでの態度への後悔が伝わってきました。終幕で収骨台に白い光があたる意味は、義幸さんが家族のもとに帰ったことを表しているとも、義幸さんの愛されていた姿を映し出しているとも見えて、観る人によって様々な捉え方ができました。

大切な人を失うという出来事をきっかけに、登場人物それぞれが自分の思いを正直に打ち明けることができたところがこの作品の肝だと思いました。改めて、家族に日々の感謝を伝え、後悔しないように生きていこうと思いました。心温まる素敵な劇をありがとうございました。聖霊高校の皆さん、お疲れさまでした。